

主張

保団連も
参加した、
第27回日本
医学会総会
出展「戦争
と医学」展

実行委員会の取り組みを継承発展させ、第28回日本医学会総会(2011年、東京)などに向けて、さらに検証に必要な活動を進めるべく、9月27日「会」の設立大会を持ちました。

最近の医学・医療の進歩発展は著しく、人類は新たな倫理的問題に直面しています。医学者・医師も、自らの問題としてその解決を求められています。

その取り組みに際しては、医学・医療のこれまでの歩みを真摯に振り返るこ

とは不可決です。

特に日本の場合、日本の医学会・医師会がかつての戦争に加担したことや、日

本の医学者・医師が戦争中に、731部隊や戦地等で行った「人体実験」「生体解剖」「生体手術練習」、九

めに、その全貌はいまだに明らかではなく、検証は容易ではありません。

731部隊に関しては、戦後、連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)は、関係した多くの医学者・医師を訪問しましたが、研究結

年の世界医師会加盟にあたり、「日本の医師を代表する日本医師会は此の機会に、戦時中に敵国人に対して行った暴行を非難し、又行われたと主張され、そして2、3の場合には実際行われたという患者の虐待行

を訊問しましたが、研究結果を得るために戦争犯罪を不問とする取り引きをしました。このような経緯の中で、日本の医学会・医師会では「真相は不明」「解決済み」あるいは「タブー」とされました。

「戦争と医の倫理」の検証を

「会」の設立と取り組みの意義

大捕虜解剖事件等の非人道的行為について、自ら真摯な検証を行い、その教訓を生かすことは欠かせません。

しかし、当時の資料の焼却、逸散と、残された資料の「未公開」「隠蔽」のた

果を得るために戦争犯罪を不問とする取り引きをしました。このような経緯の中で、日本の医学会・医師会では「真相は不明」「解決済み」あるいは「タブー」とされました。

日本医師会は、1951

為をどがむ」と声明し、問題解決済みとしてきました。

これは、日本の医学者・医師の戦争中の行為を真摯に反省し、その後目指すべき人権差別の根絶、人権擁護を基調とした日本の医

学・医療のあり方を示したものは到底いえません。史実を明らかにし、検証を進めることは、医の倫理の確立や、これからの医学・医療のために不可欠ではないでしょうか。

その際、日本の医学界・医療界を代表する日本医学会、日本医師会やかわった学会・大学などが、自らの問題として取り組むことは欠かせません。

決して、過去の問題として終わらせ済ませてしまうわけにはいきません。昨今でも、新自由主義・構造改革路線政治によって、医学者・医師としての倫理すらも踏みこむ攻撃に抗するためにも必要な「会」の取り組みであると考えます。